

第6章

日本綿花

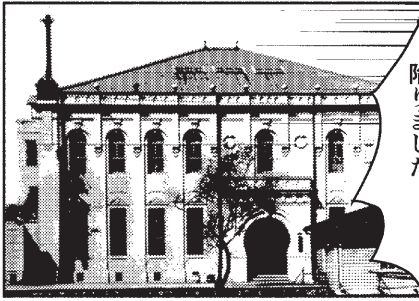
喜多又蔵の奇策と人造絹糸を巡る戦い



戦後不況は
紡績業界にも
波及していた

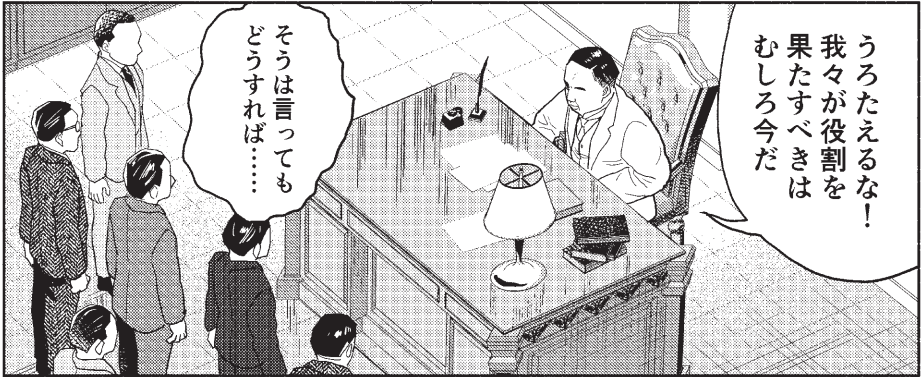
大正九(一九二〇)年
三月一日

喜多社長
大変です！
綿系が大暴落して
取引所は機能不全に
陥りました



うろたえるな！
我々が役割を
果たすべきは
むしろ今だ

そうは言っても
どうすれば……



東洋綿花の
児玉一造さんと
会おう
他の紡績会社の
幹部とも会う
業界を動かすんや

えっ
あのライバルの
児玉さん!!





そして
その予測は的中した



おお！喜多又蔵
やりよった！

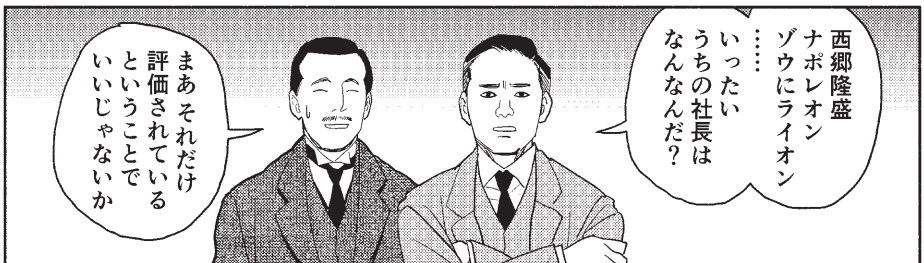
ニューヨーク
綿花市場も大暴落し
数千万ドルの差益が
紡績会社にもたらされた



しかしいざとなると
ライオンのように
覇気をはく綿業界の
ライオンじゃ！

ゾウのような
大きな体で細く優しい眼
そして西郷さん
のような巨漢と居眠り癖

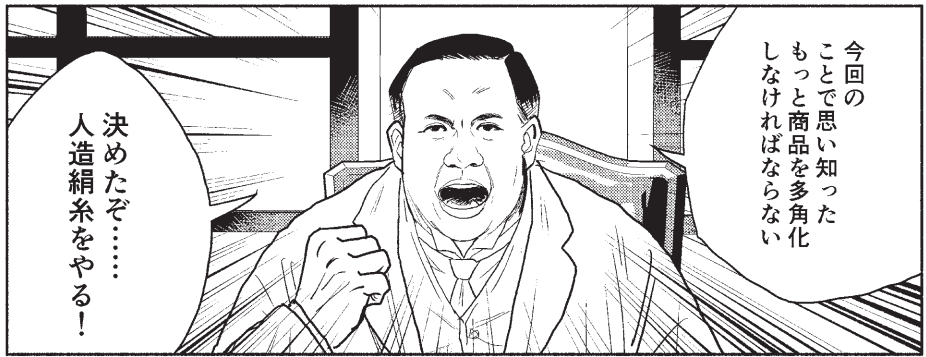
※西郷隆盛は江戸城無血開城の際、大広間で居眠りをしていたという。



まあそれだけ
評価されている
というだけで
いいじゃないか

西郷隆盛
ナポレオン
ゾウにライオン
……
うちの社長は
なんなんだ？

※喜多の頭、顔はライオンに似ていると言われた。



その頃バリでは……

上島くん
君は日本綿花の
喜多社長の支援を受けて
フランスの技術で
人絹を製造しようと
しているのか
実は私も同じような
ことを考えている

ただ日本ではまだ
需要が少ない
ここで競合すれば
共倒れしてしまう
こはひとつ
提携しようじゃ
ないか？

そうですね
喜多社長とも
相談して
みますが
合意されると
思います

後に15大財閥に数えられた
日窒コンツェルン
の代表者

野口 遵



欧米視察中の
帝人の久村清太が
ロンドンの高畑邸を
訪問していた

高畑により
野口遵も招かれていた

ここで日本の人絹
戦後の化学繊維産業の
趨勢を左右する
歴史的なやり取りが
行われる

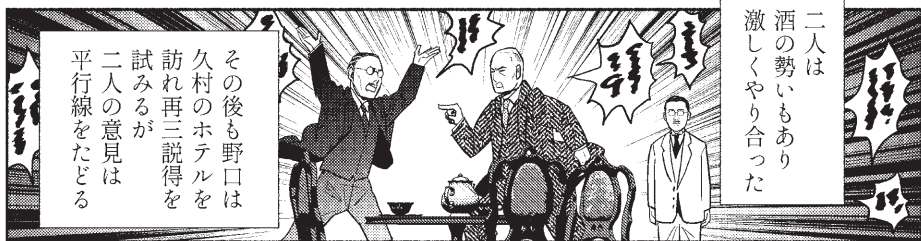
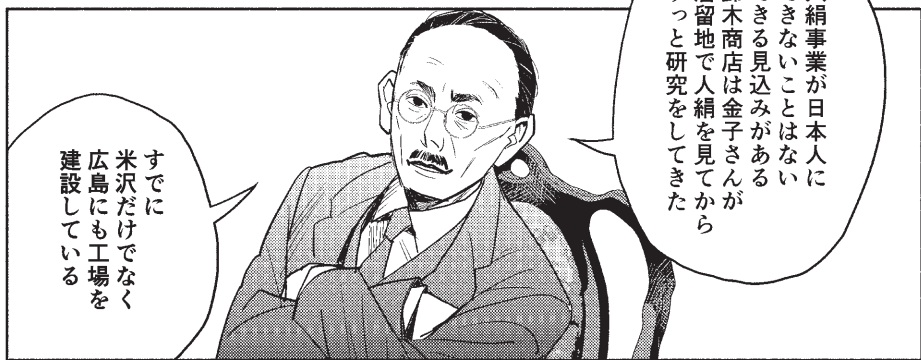


私は日本で人絹工業を
開始するつもりだ
久村さん
君も人絹をやるなら、
後で血の出るような
競争をするより
初めから合同して
やろうじゃないか？

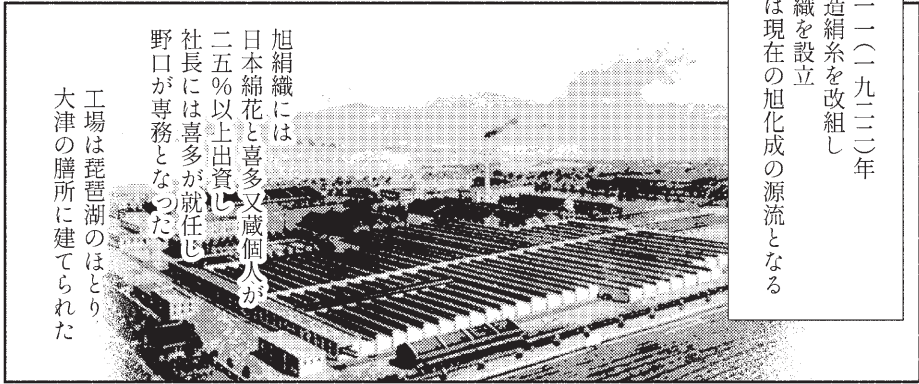
私は日本綿花の
喜多さんとも協力
するつもりだ

あの仕事は
日本人にはできない
西洋の会社の技術を買収
するより方法はない





大正一（一九二二）年
旭人造絹糸を改組し
旭絹織を設立
同社は現在の旭化成の源流となる



旭絹織には
日本綿花と喜多又蔵個人が
二五%以上出資し
社長には喜多が就任し
野口が専務となった

工場は琵琶湖のほとり
大津の膳所に建てられた

その四年後の
大正一五（一九二六）年
三井物産は
英国の技術を導入し
東洋レーヨン
（現・東レ）を設立
こちらも工場は
大津に建てられる

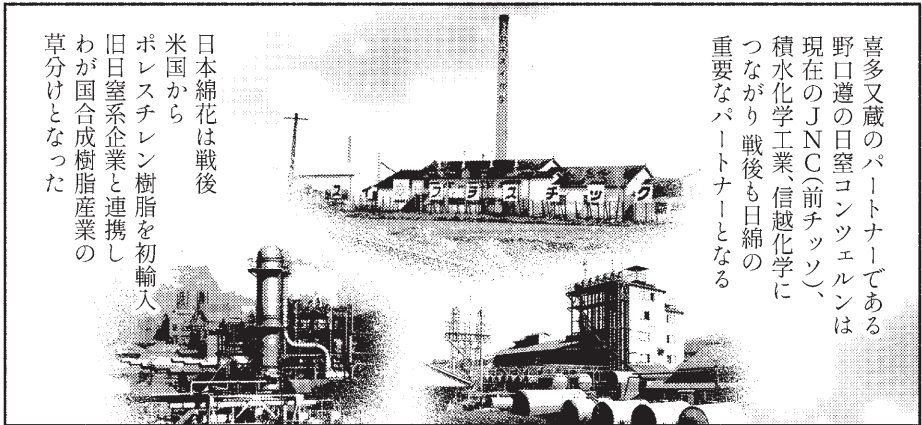


しかし
人絹の量産化までは
もう少し時間を要する
ことになる

この人絹の製造には
工業塩を原料とする
大量のソーダが必要であった



喜多又蔵のパートナーである
野口遵の日窒コンツェルンは
現在のJNC（前チッソ）、
積水化学工業、信越化学に
つながり戦後も日綿の
重要なパートナーとなる



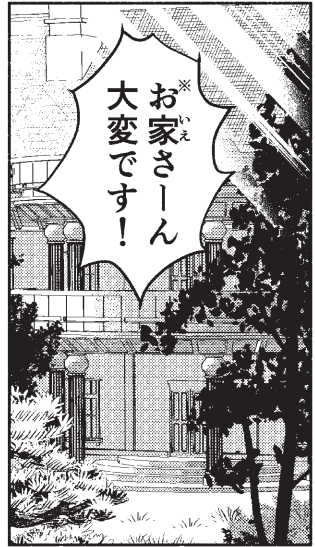
日本綿花は戦後
米国から
ポレスチレン樹脂を初輸入
旧日窒系企業と連携し
わが国合成樹脂産業の
草分けとなった

大正九（一九二〇）年
神戸では鈴木商店が
海岸通りに新たな本店を
構えることになる

さすがは
鈴木商店
立派な装飾や

この装飾
英国皇太子来日に
合わせてのもの
らしい

ロンドンでは
高畑さんが大活躍
らしいぞ



※ 主人の母＝鈴木よねのこと



※ 現・神戸市立神港橋高校

おばあ様も
今後は女子も
実業に携るべきだと
張り切っているのよ

おお
素晴らしい！
女性が活躍する
日本の
未来は明るい

そう未来……
次世代を担う
優秀な……
若者おおお
おおうお

直どん
どないしたん？
ちよつと
落ち着いて……

はあっ
すいません……
それがですね……

ロンドンにて

高畑君
君は優秀だ
どうだ
私の娘と結婚
しないか？

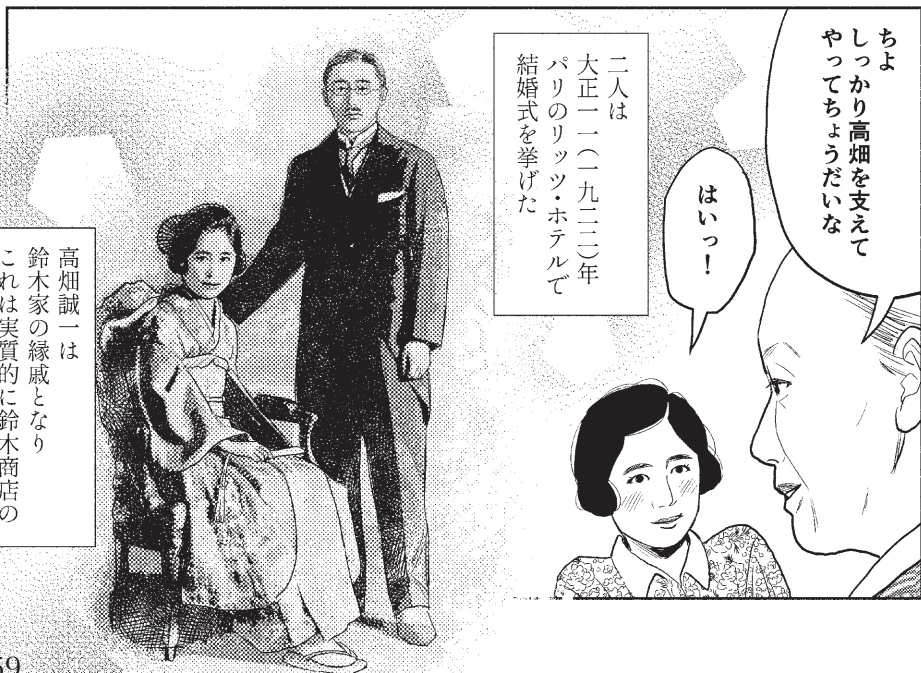
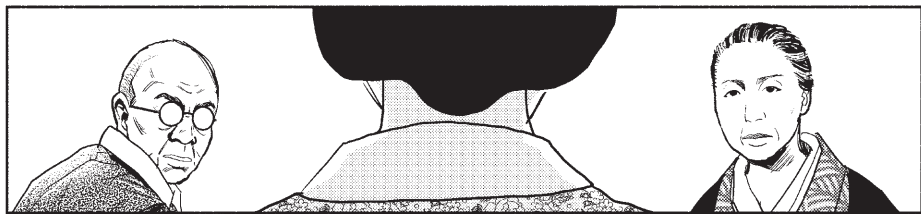
うっそれは……
松方家の一員になると
いうことです
光栄ですが
金子さんとも相談
しなければ……

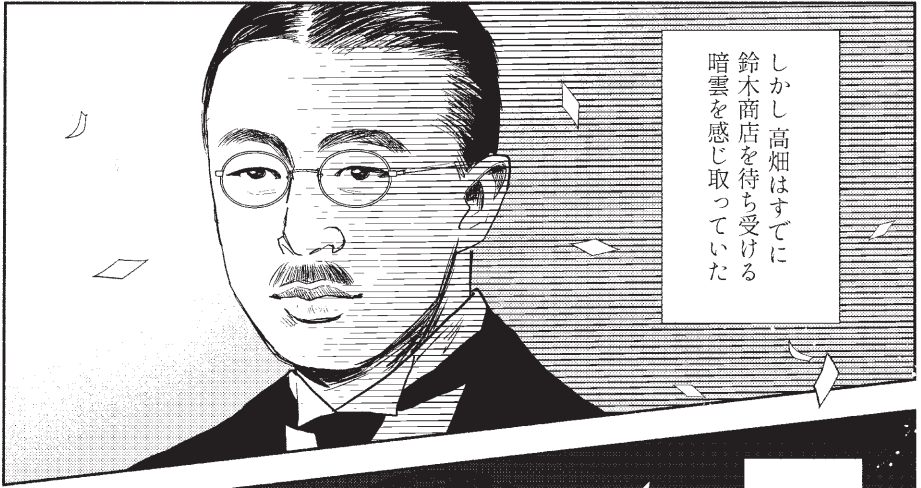
色よい返事を
期待しているよ

とまあ
こんな次第で……

このままでは高畑が
松方さんに取られてしまいます
今後の鈴木商店を任せられるのは
高畑しかありません！

それはいけませんなあ





しかし高畑はすでに
鈴木商店を待ち受ける
暗雲を感じ取っていた



第一次大戦の終了は
大戦景気の終了を意味した

世界経済は後退局面に入り
日本の前途には長期不況と
大事件が待ち構えていた

しかし双日の源流三社の
起業家精神、開拓者精神は
どんな不遇にあっても
衰えることはなかった――